

英国の大学における就業力育英教育並びに 就職支援活動

富田裕子

はじめに

成城大学にキャリア支援部が設置され、就業力育成・認定プログラムが始まってから既に2年半が経過した。キャリアデザイン科目の英語プログラムは時事英語IとIIから成り、私はIを1年目に、IIを2年目から担当している。受講生から下記のような質問をたびたび受ける。英国の大学にも就業力育英教育というものがあるのか。あるとすれば授業内容は。また英国の大学は他にどんな就職支援活動を学生に提供しているのか。本稿ではまずこういった質問に答えると同時に、日本ではほとんど知られていない英国の大学における就業力育英教育並びに就職支援活動についての最新情報を提供したい。日本の多くの大学で過去5年間に就職相談センターやキャリア支援部が新設、増設された。英国ではキャリアオフィス(Career's Office)と呼ばれる施設が大学内に存在し、現在では規模も大きく、広範囲に亘るサービスを提供している。本稿ではキャリアオフィスの活動内容をまず紹介し、学生たちがこの施設をどのように利用しているかを把握した上で、キャリアオフィスが果たしている重要な役割、業績について考察してみたい。更に英国の大学が実施している就業力育英教育並びにその他の就職支援活動を日本の大学と比較して共通点、相違点を指摘できればと思う。最後に日本の大学が英国の大学の就職支援活動・就業力育英教育から学べる点を論じ、具体的に日本の大学の就職支援活動に将来どのように活かすべきかを考察したい。

英国の初等教育、中等教育、成人教育、障害者教育について日本語で書かれた著書や論文は多数存在するが、英国の大学教育について論じたものは少ない⁽¹⁾。その中でも大学における就業力育英教育並びにその他の就職支援活動について日本語で言及したものは私の知るかぎりでは存在しない。そこでこの分野におけ

る最新情報を入手するため 2013 年夏に渡英し、私が修士号を取得したレスター大学と博士号を取得したシェフィールド大学を訪問し、キャリアオフィスの関係者のもとより、両大学の教員、事務員、大学生に聞き書きを行った。また他大学に在籍している現役大学生、現在大学生のいる家庭の親たち、近い将来大学への進学を考えている 10 代の子供を持つ家庭の親たちと子供たち、大学卒業生、中等学校 (secondary school) の教員たちの話を伺う機会にも恵まれた。更に私は卒業生にも転職、再就職などに関するアドバイスを提供している母校のレスター大学のキャリアオフィスで、私が転職を考えているという設定で、そこに勤務する専門家から 2 回に亘ってカウンセリングを受ける機会にも恵まれた。この貴重な体験を通して、キャリアオフィスの活動内容を更に深く理解し、このオフィスの活動が現役大学生、卒業生の就職、転職にどれほど有益かを改めて実感した。それに加えて数々の聞き書きを通して文献からは通常得ることが出来ない貴重な情報を入手した。またレスター大学のキャリアオフィスが出す就職情報満載のちらしやパンフレット、オフィス受付に常時置かれている他の地方行政機関、政府の関連団体、多くの企業が出版した就職に役立つ本、雑誌、新聞なども参照することが出来た。加えて本稿執筆にあたり英国の各大学のキャリアオフィスのホームページなどに掲載されている情報も最大限に活用した。本稿では今まで紹介されることのなかった英国の大学における就職支援活動の最新情報を提供したい。

英国の大学のコース

英国の大学並びに大学院における就業力育英教育は学生が専攻しているコースの中に組み込まれていることが多い。大学並びに大学院のコースは卒業後すぐ就職に結びつく vocational course と結びつかない non-vocational course の 2 つに分かれている。医学、看護学、薬学、法律学、経済学、会計学、ビジネス学、マネジメント学、マーケティング学、建築学、測量学、IT (情報技術学)、情報学、教育学、博物館学、社会福祉学、工学、応用科学などが前者に属し、歴史学、英文学、社会学、考古学、映画学、美術史学、マスコミュニケーション学、政治学などが後者に属する。そして前者の中には日本には存在しないサンドイッチコースと呼ば

れるコースが多いのも特色として挙げられる。また後者に属するドイツ語、フランス語、スペイン語、ギリシャ語、イタリア語、中国語、日本語、韓国語の現代語を学ぶ modern language 学部にも専攻している外国語をその言語が話されている国で1年間勉強する日本にはまだ存在していない year abroad システムと呼ばれる一種の職業教育を含むコースが多くある。

大学院のコースの中には PGCE (Postgraduate Certificate of Education) と呼ばれる初等学校 (primary school)、中等学校 (secondary school) 教師養成コース、英語を母語としない学生に英語を教える ELT 教師養成コース、ソーシャルワーカー養成コース、学芸員養成コースなどの vocational course があり、人気を博している。

現役の大学生あるいは将来大学入学を希望している 10 代の生徒の中で人気があるのは何学部なのだろうか。バッキンガム州の公立の中等学校 (secondary school) でドイツ語とフランス語を過去 20 年間に亘って教えているマリア・コリンズに話を聞いてみた。英国人が英国の大学に入学するためには 3 教科あるいは 4 教科の A (Advanced) level と呼ばれる全国共通試験を受験し、合格しなければならない。その試験結果、応募書類の内容、面接などで各自の志望校への入学が決定するシステムが採用されている。

コリンズによると、昔は文科系の科目で A レベルを受験する生徒が多かったが、最近では理数系の科目で受験する生徒が大幅に増えたという⁽²⁾。進学希望学部で言えば、医学部、歯学部、薬学部、工学部、法学部に人気が集中しているとのことだ。またレスター大学の副学長スティーブ・キング教授の話では、学部の中でここ 5 年間に著しく学生数が減少しているのは、映画学、美術史学、マスコミュニケーション学部だそうで、これらの学部はこのままの状況が 2・3 年続けば閉鎖に追い込まれるであろうとのことである⁽³⁾。政治学部、歴史学部、英文学部、社会学部の学生数も減少傾向にあるが、医学部、法学部、心理学部の応募者数は近年大幅に増加し、競争率が年々激しくなっているようだ。

上記したような医学、歯学、法学部のような vocational course の志願者の急増と文科系コース離れを引き起こした原因は何だったのか。一番の原因として考えられるのはリーマンショックである。リーマンショック以降、英国経済は衰退し、加えてユーロ圏における国々の財政破綻も追討をかけ、英国政府の財政は悪化

する一方で、失業率、特に若者の失業率が上昇した。リーマンショック以前は、大学卒業生の失業率は大学に進学しなかった者のよりずっと低く、前者の収入の方が後者よりはるかに高かった⁽⁴⁾。また大学卒業生が専攻分野の知識を活かせる仕事に就くことも難しくなかった。しかしリーマンショック以来、大学を卒業しても定職に就けず、専門分野とは全く関係がないスーパーのレジ係、レストランやコーヒーショップのウェイター、ウェイトレス、店員のような従来は大学に進学しなかった技術を持たないワーキングクラスの人たちが携わるような時間給の低いアルバイトや短期契約の仕事にしか就けない大卒の数が急増した⁽⁵⁾。

二番目の理由として挙げられるのは、トニー・ブレア政権のもとで導入された大学生に対する授業料の有料化である。これは大学財政の立て直しのために採られた政策であった。それまで地元の教育委員会が授業料、学費を支給していたが、1998年から学生たちは年1500ポンドの授業料を支払うこととなり、その後2006年より平均して3000ポンドへ、更に2012年の9月からは9000ポンドまで一気に上がった⁽⁶⁾。ただし2012年9月以前に入学した学部生は入学時の授業料が卒業まで適応されることになっている。しかしこの制度はイングランドの学生のみ当てはまり、ウェールズ、北アイルランドの学生が出身地域の大学に進学する場合は今まで通り年3000ポンドである。またスコットランドで育ち、そこで初等、中等教育を受けた者が大学に入学した場合は、進学先の大学がスコットランド以外のイングランド、ウェールズ、北アイルランドであっても、スコットランド政府が今まで通り授業料を負担するシステムになっている⁽⁷⁾。

特にイングランドの大学生の場合、高額な授業料を納めるため、ほとんどは国が管理する学生ローンを組み、ローンの返済は卒業後に就職先の月々の給料から天引きされ、50歳までに返済を終える仕組みとなっている⁽⁸⁾。

高額な授業料を支払い、多額な借金を背負って大学に進学するのであれば、卒業後高収入が得られ、現在英国で人員が不足している専門職の資格が得られる医学、歯学、法学部に人気が集まるのは無理もない。3人の娘を持つジェフ・エルウェルに話を聞いてみた。彼の話をもとめると次のようになる。

私はヨーク大学を卒業後、British Shoe という大会社に就職し、マネジメント部に所属し、前途を嘱望された。しかし就職から10年後に経営が傾き始めたことを機に、依願退職し、自らビジネスを立ち上げ、今は順調にしている。私には3人の娘がいる。長女のケイティーは、私の仕事に大変興味を持ち、大学進学前も私のビジネスを手伝ってくれた。ビジネスの才覚があるので、彼女はブライトン大学のビジネス学部で学んでいる。次女のオリビアは、離婚した妻が医療関係の仕事に携わっていることもあり、リバプール大学の歯学部に進学し、現在3年生だ。17歳の三女のリビアは中等学校で大学入学に絶対必要なAレベル獲得のため勉学に励んでいる。本人は医者を目指しているが、Aレベル一年目のAS試験の結果は芳しくなかったが、好成績に到達するまで何度でも受験し、必ず医学部に入ると意気込んでいる。上の2人の娘は2012年9月以前に大学に入学したため、授業料は一人当たり年間3000ポンドで済むが、三女の場合、何学部に入ろうと年9000ポンドの学費を納めなければならない。親として出来るかぎりの資金援助をするつもりだが、医師が駄目でも他の高収入が得られる専門職に就けるような大学のコースを慎重に選んで欲しい⁽⁹⁾。

ジェフ・エルウェルのように大学を卒業して自らが成功を取っていたり、専門職に就いている親たちの中には、子供たちにも大学を卒業し、自分たちと同様専門職に就く道を歩んで欲しいと考えている人々が多い⁽¹⁰⁾。その一方で、大学にも行かず、専門職にも就いていない親たちの中には、多額の借金を抱えてまで無理に大学に行く必要はないと言い切る者も急増した⁽¹¹⁾。このような現状を踏まえれば、vocational course に人気が集まるのは当然のことだ。こういった学部で非常に注目されているコースは sandwich course (サンドイッチコース) と year abroad course (一年間の海外研修コース) である。両コースとも日本の大学には存在しないので本稿ではまず二つのコース内容を紹介したい。

サンドイッチコース

(1) サンドイッチコースの定義

英国の大学のほとんどの学部のコースは普通3年で卒業できるが、サンドイッチコースを卒業するには4年かかる。このコースを選択した学生は、最初の2年間大学で専門分野の学術的訓練を受け、3年目の1年間は、専門分野を活かせる企業あるいは組織で研修生（インターン）として働くことで実務経験を積み、4年目に再度大学に戻り、卒業試験を受け、卒業論文を提出して卒業する。サンドイッチの両側のパンは学術的勉強、真ん中は実務経験に当たる。元来サンドイッチコースはエンジニアリングやテクノロジーを専攻する大学生のために作られたものであったそうだが、現在ではマネジメント、ビジネス、マーケティング、建築学、測量士のコース、IT、情報学など広範囲に亘る学問分野でこのコースが導入されている。またサンドイッチコースは昔のポリテクニク（現在の新大学）で始まり、今では伝統あるオールド・ユニバーシティーにも広く浸透している⁽¹²⁾。

(2) ケイティー・エルウェルのケース・スタディ

企業での一年に亘る研修とは一体どのようなものなのか。その実態を探るために現在ブライトン大学のビジネス学部のサンドイッチコースの4年に在籍し、3年次に1年間企業研修を行った前述したジェフ・エルウェルの長女、ケイティー・エルウェルに聞き書きを行った。彼女の話をもとめると次のようになる。

私がサンドイッチコースを選択した理由は、実業家である父の勧めからだ。実際のビジネスのノウハウを学ぶためには大学で学問的なビジネスの理論を学ぶことも勿論大切であるが、その理論を実際のビジネスでどのように活かしていくかの方が更に重要である。このことを実際に体験している私の父は、大学卒業前に実務経験を積むことができるサンドイッチコースが私の将来に有利に働くと考えた。私は2年の時、3年次に1年間研修できる企業を、大学のキャリアオフィスのホームページに掲載されていたインターンシップを提供している企業のリストの中から選び、関心のある4社に絞り、自ら応

募し、履歴書などを送付した。するとまもなく4社から、面接を受けるようにとのメールが届いた。面接終了後、すべての企業から研修生として1年間働いて欲しいという内容の手紙をもらった。私の実家はミッドランド（中部地方）のレスター（Leicester）市なので、実家に比較的近いバーミンガム（Birmingham）市にある大手の製薬会社を選び、1年契約で事務職の研修生として入社した。私の場合研修生と言っても有給で、一年で15,000ポンドが支給された。英国の大卒の事務職の平均的な年収である20,000～22,000ポンドに比べると少し低いものの、私の収入は大卒ではない秘書などの年収より高く、贅沢さえしなければ家賃を支払っても十分暮らしていった。私の研修期間は、大学で2年生の期末試験をすべて終え、進級が確定した夏休み中の8月初めから、翌年の9月の第1週までの1年間であった。最初の6か月間は顧客サービス部に、残りの6か月はIT部に配属された。最初の2か月間仕事らしい仕事はさせてもらえなかったが、その後は上司の指導のもと、顧客からの問い合わせ、クレームの電話対応を任せられるようになり、顧客サービス部の仕事に少しずつ慣れていった。IT部に移ってからは40代の有能な女上司並びにIT専門家の指導のもと、企業内でのITに関する質問やトラブルに電話並びにメールで対応する仕事をした。入社11か月後には仕事にもすっかり慣れ、他の大卒の正社員とほぼ同じ仕事を任せられ、8月初めに研修生として入社した新人の世話係まで任せられた。1年以上経過した9月初めに、大学に戻るため退社した時には、社長から大学卒業後正社員として戻ってくるよう言われた。私の1年に亘る業績が評価されたのは大変嬉しかったが、卒業後は海外での就職を考えている私は、せっかく頂いたオファーをお断りしてしまった。しかし1年間の研修生としての生活は、自分も企業で認められるだけの仕事ができるようになったのだという自信を与えてくれたばかりでなく、社会人としての自覚もでてきた。また給料が支給されたことで、自活でき、いろいろな人々とも知り合いになれた。加えて将来ビジネスリーダーとして働きたいという意欲も湧いてきた。大学最初の2年間で学んだ学問としてのビジネス学は研修期間中大いに役立ち、サンドイッチコースを選択して本当によかったと思う。しかし1つだけ不満な点は給料を得て自活できる

ようになったのに、卒業までの1年間大学に戻り、また無給の学生生活を送るのは残念でもあり、不安でもある⁽¹³⁾。

(3) サンドイッチコースの利点

ケイティー・エルウェルの聞き書きからおのずとサンドイッチコースの利点がいくつか明らかとなった。まず3年時の1年間の実務経験は卒業後の就職に大変有利に働くという事実である。日本の企業は長年に亘り大卒の従業員のトレーニングに多くの時間とお金をかけ、初めから仕事ができる新入社員など期待してこなかった。しかし英国の大学生の就職希望先である英国並びに他のヨーロッパの企業あるいはユニリーバーのような多国籍企業は雇用後に社員を訓練するつもりはない。大卒の場合は就職後すぐに第一線で働くことができ、会社に貢献出来るような優秀な人材だけを採用する傾向にある。そのため雇用の際企業は、応募者にその企業と直接関係のある専門分野の学問的知識があるかどうか、また履歴書に記されている職歴並びに実務的な能力の高さを見極めるそうだ⁽¹⁴⁾。その結果英国の大学生にとって大学時代の実務経験は就職の際、極めて重視されるため、サンドイッチコースで学んでいない者であっても、夏休みやイースター休暇中に企業で短期の研修をする学生や学期中の週末だけを利用して積極的に研修活動をする学生が多い⁽¹⁵⁾。研修以外にもボランティア活動に携わるなどして在学中に社会経験を少しでも多く積んでおこうと真剣に考えている者が多いことにも驚く⁽¹⁶⁾。研修先の企業で出来るだけ数多くの人々と接触し、交流を深め、就職に対する助言を仰いだり、情報提供してもらったりすることも有益だと考えている。更に研修先の上司に推薦依頼も可能となる。ケイティーのように有能な人材であると上司から認められた場合には、卒業後の就職が約束されるケースも多く、企業によっては卒業後の就職を条件に、大学最後の1年間の授業料支援を申し出るところもあるようだ⁽¹⁷⁾。実際サンドイッチコースで学んだ学生の方が学ばなかった学生より圧倒的に就職率が高く、就職後も企業において成功を収める場合が多く、昇格も速いと聞く。なぜなら研修中に自分の能力を的確に把握する機会に恵まれた学生は就職後自分の能力を最大限効率的に発揮することが出来るようになり、それに見合った報酬を得られるようになる。業績中心主義を採る西洋

の企業はこういった人材を常に求めているのは事実である。研修中に培った能力は学問の分野でも発揮されるようだ。たとえば1年間の企業での研修を終え大学に戻ったサンドイッチコースの学生の最終年次の成績は成績は、同人物の1、2年時の成績よりかなり上がっている場合が多いことから証明できるだろう⁽¹⁸⁾。

次にサンドイッチコースの1年の研修中はケイティーの場合のように有給であることが多いため、モチベーションが上がる。また有給の場合、大学1.2年の時に負った借金を少しでも減らすことも可能となる。以上のような点からサンドイッチコースは益々人気を博すようになってきている。

Year abroad course

英国の大学にはサンドイッチコースの他に Year abroad course もあり、一年間海外の大学への留学、あるいは海外の学校、企業、団体での実習を義務付けている。現代語 (modern languages) コースが典型的な例である。英国の大学ではフランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語、ギリシャ語、アラビア語、ロシア語、日本語、中国語、韓国語など様々な現代語を学ぶことができる。現代語コースの学生は、1、2年で各自が専攻している言語の4技能（話す、聞く、読む、書く）をほとんど直接法（学んでいる言語ですべて行われる授業）で学び、学問的な知識も同時に習得する。3年次には専攻言語が話されている国に1年住むことが義務付けられ、4年次には大学に戻り、卒業論文を書き、卒業試験を受けて卒業するのが常である⁽¹⁹⁾。

3年次にはたとえばドイツ語を専攻している学生であれば、1つ目の選択肢として、ドイツ語圏の大学に留学生として1年間学ぶことができ、その場合所属大学の国際交流部などが中心となってドイツ語圏の提携校と交渉しお膳立てしてくれる⁽²⁰⁾。この場合授業料は英国の大学に納めれば、ドイツの大学に納める必要はない。2つ目の選択肢は、ドイツ語圏の小、中、高等学校でフルタイムの有給の英語教師として1年間働くことだ⁽²¹⁾。海外での英語普及と英国の生活と文化の紹介を目的とする英国政府後援の組織である英国文化振興会 (British Council) に相談すれば、仕事を比較的に簡単にドイツ圏に限らず世界中の学校で見つける

ことができるようだ。3つ目の選択肢はドイツ圏の企業、団体などで実習生あるいは臨時職員として1年間働くことである⁽²²⁾。この場合職は自分で見つけなければならないが、後で詳しく述べる大学のキャリアオフィスが手助けしてくれる。英国籍の学生はEU諸国であれば労働許可証なしで働くことができるが、それ以外の国では労働許可証が必要となり、更に国により医療制度が異なるため海外保険に加入しなければならない場合もある⁽²³⁾。有給の仕事に就ければいいが、無給の場合生活費をどうするかも問題となる。レスター大学でドイツ語を専攻し、year abroad scheme でドイツの公立中学で1年間英語教師として働いた経験を持つマリア・コリンズに聞き書きを行った。

専攻の語学圏で大学3年次に1年間住み、実際に生活するというは大変有益である。私の場合、大学2年次終了段階で中の上レベルのドイツ語力は身につけていたが、やはりネイティブ並ではなかった。しかしドイツ人のランドレディーの家に住み、毎日朝夕食事を共にしてドイツ語で会話を交わしたことでドイツの伝統や文化などを学ぶことができた。勤務先の学校で私は英語を教えていたが、英語が母語であったのは私一人で残りの先生はすべてドイツ人であった。そのためミーティング、学生のための報告書などすべての校務をドイツ語で行わなければならなかったのも、最初のうちは戸惑ったが、1年後には格段にドイツ語のレベルがアップした。ドイツの公立学校の事情にも精通し、ドイツ人の友人が多くできたことも収穫であった。更に4年次に大学に戻るとネイティブと同程度のレベルの高いドイツ語を話すことができた。私は卒業後PGCEコース(公立学校教員養成コース)に進み、コース終了後バッキンガム州にある公立の中でも極めて高レベルの中等学校でドイツ語担当専任教員として働くことになった。英国ではドイツ語のクラスは初級からすべてドイツ語で教えなければならないので、求人広告をみて応募した学校の面接はどこも英語とドイツ語で行われ、高度なドイツ語能力が要求された⁽²⁴⁾。

コリンズの話では、彼女のレスター大学のクラスメートも全員1年間のドイツ語

圏での生活を経験していたので、卒業時に大半の学生はドイツ語が堪能で、教員職など語学力を活かせる職場に比較的容易に就職が決まった。大学卒業前に高度な語学力を身に付けた者は、現在のような不況の折も就職難に陥ることは少ないようだ。1990年代には Year abroad のプログラムは主に現代語コースの学生を対象にしていたが、現在ではビジネス学、経済学などを専攻している学生も対象にするようになった。現在のような就職難の時代、自分の専門分野に加えて外国語を1つでもマスターしていると就職に極めて有利に働くため、Year abroad のプログラムが入っていない学部生の中にも、エラスマス学生としてヨーロッパの提携大学への留学を希望する学生が昨今では増加している傾向にあるようだ⁽²⁵⁾。

大学院における職業コース (vocational courses)

大学院の職業コースの中で最も人気があり、確実に職業に結びつくコースといえば、まず Postgraduate Certificate of Education(略して PGCE) という英国の公立学校の教員になるための資格免許が得られるコースが挙げられるであろう。このコースに入るための最低条件は大学卒業生で、ボランティアであれなんらかの教育活動に携わった経験者であることだ⁽²⁶⁾。1年間のフルタイムのコースで、6か月間は大学で教育理論などを学び、残りの6か月間は教育現場で教育実習を行う。教育実習校はレスター大学の場合、多くの公立の初等学校、中等学校と協定を結んでいるので、ほとんどの実習生は大学が手配するレスター市内あるいは近郊の公立学校で実習を行う。しかし日本語のようにレスターの公立学校で教えられていない科目については学生が自分で教育実習先を見つけることを前提としてコースへの入学が許可される。教育実習中は週に何度か授業を担当し、実習先の教師からアドバイスをもらい、父兄会の企画を任されることも多く、実習が終了するころには専任教員と同じ仕事をこなせるまでになるとのことだ⁽²⁷⁾。

日本では各都道府県で実施されている教員採用試験に合格しなければ公立学校の教員にはなれないが、英国にはこのような試験は存在しない。在学中に教員募集が掲載されている週1回刊行の *TES (The Times Educational Supplement)* の求人広告を見て、希望する学校に直接応募し、面接を受けて就職先が決定するという

のが通例である。リーマンショック以来、その他の分野では大学院のコースを終えてもなかなか就職出来ない人の数が増加傾向にあるが、PGCE コースの修了者は今でも地域を限定しなければ比較的簡単に就職でき、中でも数学、科学の教師は非常に不足しているため、引っ張りだこという⁽²⁸⁾。

PGCE 以外で人気のある大学院の職業コースはソーシャル・ワーカー、学芸員の資格が取れる Postgraduate Diploma や MA (Master of Arts) コースである⁽²⁹⁾。前者はフルタイムで1年、後者はフルタイムで2年のコースである。ソーシャル・ワーカーのコースも PGCE 同様、コースの半分は大学での講義で、残りの半分は州が運営する機関で実習を行うことが義務付けられている。ノッティンガム・トレント大学で1年間のソーシャル・ワーカーの Postgraduate Diploma コースを修了し、ソーシャル・ワーカーの仕事に就いたシーラ・レントンは次のように語ってくれた⁽³⁰⁾。実習先の機関では家庭内における幼児虐待、アルコール中毒患者・薬物依存患者が引き起こした事件、家庭内暴力などあらゆるケースを扱っていて、初めのうちは、幼児虐待を担当しているソーシャル・ワーカーについていくつかのケースの情報収集などを手伝った。その後、被害者、加害者のカウンセリングなども任せられ、大学の講義では学ぶことのできなかった貴重な経験を積むことができた上に、多くのソーシャル・ワーカーとも知り合い、ネットワークが広がった。コース終了後すぐには仕事が見つからなかったが、実習先でパートとして働くことができ、1年後に同僚が定年退職した際、終身雇用を得た。彼女の同級生のほとんどがソーシャル・ワーカーとして就職できた。

レスター大学の学芸員 (Museum Studies) のコースも大変人気があり、Postgraduate Diploma のコース、MA (Master of Arts) コースでも学生はコース終了前の8週間はレスター大学と提携している英国全土の博物館あるいは美術館での実習が義務付けられている⁽³¹⁾。たとえば日本の芸術を専門分野に希望している学生ならばロンドンの大英博物館で実習を行うことが可能であるが、留学生の場合、英語が堪能でなければ許可が下りない。最近このコースに留学生が増え、卒業生の多くは英国はもとより、世界中の主要な博物館、美術館で学芸員、管理者、館長として活躍しているという。前記したような英国の大学院における職業コースは学問として学んだ知識を現場で実際に活かして多くの経験を積むというプロ

グラム構成になっているため、卒業後の就職に有利に働くと同時に就職先で即戦力となる。

英国の大学のキャリアオフィス

(1) キャリアオフィスの開設当初の活動

英国の大学には、1980年代半ばからキャリアオフィスと呼ばれる在学生の就職支援を行う施設がどの大学にも存在していた。しかし規模は小さく、アドバイザーの数も少なかったため、その活動も非常に限られていた。1990年代の初めにレスター大学に在学していたマリア・コリンズの話によると、当時はインターネットで就職情報を簡単に入手できなかったため、キャリアオフィスでは、あらゆる分野の企業、政府団体から得た求人情報を掲示板などにより全学部の学生に提供し、面接の簡単な指導なども行っていたそうだ⁽³²⁾。また、どの大学のキャリアオフィスも1990年代の初めには50社以上のあらゆる分野に亘る企業や政府団体を大学に招くというキャリア・フェスティバルを年に1・2回主催していた。このイベントは各々の学生が関心を寄せる企業から派遣された人物と直接話し、その企業に関する詳しい情報を入手できるばかりか、具体的な質問に対する回答も得られるため、就職先を探したり決定したりする上で大いに有益であるため、現在も存続している。このキャリアのイベントには始まった当初から多くの在学生在が積極的に参加していたのは事実であるが、その他の就職相談のためキャリアオフィスを訪れる学生は少なかったようだ⁽³³⁾。しかし2000年特に2007年以降、どの大学でもキャリアオフィスの活動が盛んになり、規模も拡大した。

なぜキャリアオフィスはその時期に急発展を遂げたのか。その理由は二つあると思う。一番目の理由として前述したリーマンショックによる金融破綻、ユーロ圏のギリシャ、イタリア、スペイン、アイルランドの財政破綻の影響が挙げられる。大学を卒業してもなかなか就職できない者、フルタイムの職に就けない者、大学で専攻した技術や知識を活かせない仕事に携わっている卒業生が急増するというこれまで大卒者があまり経験しなかった事態が発生し、さらに悪化するのではないかと懸念が強まっている。この深刻な状況に各大学がどのように対処して

いくつかが緊急課題だ。

二つ目の理由として 2000 年以降英国の大学では留学生数が急増したことも挙げられると思う。ブレア政権の間、各大学が留学生の授業料を文科系で年 9000 ポンド、理科系で年 10,000 ポンドまで値上げし、留学生を積極的に受け入れて、大学の財政難を乗り越えようとした。英国には 134 しか大学がなく、バッキンガム大学以外はすべて国立大学であり、世界の大学ランキングベスト 100 の中にもケンブリッジ、オックスフォード以外にもかなり多くの大学がランキングされていて、学術的に高い世界評価を受けている。そのため留学生の数は年々増えており、2005 年以降特にインド、中国、ブラジルからの留学生が増加の傾向にあるという⁽³⁴⁾。さらに卒業後、英国あるいはアメリカ、カナダなど他の英語圏やヨーロッパの先進諸国での就職を希望する留学生が年々多くなってきたようだ。それに伴い留学生のための就職アドバイザーが必要となり、キャリア・フェスティバルにもグローバルな企業を積極的に招くようになったのも事実である。加えて英国の大学はこれらの二つの問題に対処するため、キャリアオフィスの新設したり増設したりするようになった。

(2) レスター大学の場合

レスター大学の場合、キャリアオフィスは 2005 年にキャリア発展支援オフィス (Career Development Service) と名称を変え、スタッフも増やし、活動内容も多岐に亘り充実したものとなってきた⁽³⁵⁾。シェフィールド大学を含む多くの英国の大学のキャリアオフィスのサービスは在学生だけを対象としているが、レスター大学では在学生はもちろんのこと卒業生に対して無料で就職、転職のアドバイスをしている⁽³⁶⁾。レスター大学の場合、具体的にどのようなサービスを提供しているのか。

まず大学卒業後就きたいと思う仕事が決まっていない学生に対しては、適職を探す手引きとなるマニュアルを配布し、将来の方向付けが出来るように配慮し個別指導を行っている⁽³⁷⁾。次にキャリア発展支援オフィスは就職に関するあらゆる情報を提供するホームページを作成し、定期的に更新している。特に求人情報に関しては英国の国家公務員、地方公務員、様々な企業の求人広告のホームペー

ジや Unitemps という日本のハローワークに相当する就職代理店ともリンクしており、職種別による求人検索が可能である。また就職に役立つ小冊子を発行し、国、地方行政、企業が発行している就職情報紙、雑誌、本を常備し、在学生、卒業生に無料で配布している。加えてキャリア発展支援オフィスでは就職に役立つ様々なイベントも主催している。

その中で最も大きなイベントは前述した年に1～2回実施されるキャリア・フェスティバル (The Festival of Careers) である。英国では新学期は9月に始まるが、2013年の場合11月5日～11月8日まで4日間に亘り開催された。5日は法律部門、6日はビジネス、ファイナンス、小売り部門、7日はエンジニアリング、科学、IT部門、8日は国家公務員、地方公務員、ボランティア団体への就職希望者というように分野別に日が分かれている。このイベントにはイングランド銀行 (Bank of England)、英国軍隊、英国海軍、英国空軍、国税庁といった国家機関、Leicestershire Police や Leicester City Council などの地方行政機関、パークレー銀行、Marks & Spencers、Asda など英国の銀行、企業、法律事務所やヨーロッパ先進国の企業や Coca Cola Enterprises、ユニリーバー、Global Vision International のような多国籍企業などあらゆる分野の名だたる200以上の国営、地方行政、民営企業や団体が一堂に会した⁽³⁸⁾。

このイベントでは各々の企業、団体の代表者が各自の組織の方針、詳しい活動、運営状況、求めている人材などについて学生たちに説明するだけでなく、学生のあらゆる質問にも個別に応答する。たとえば学生の希望する企業、団体がどのような資格、技術、職業経歴を持つ人材を探しているのか。要求されるスキルを持っていない者に対しては就職のための面接を受ける前に希望する企業、団体に短期あるいは長期のインターンシップあるいは無給のボランティアとして働くことができるのか。学生たちはこれらの質問に対する具体的な回答を得られるばかりでなく、実際このキャリア・フェスティバルの場で実習生として働く許可を直接もらったり、卒業後のフルタイムの仕事がオファーされたりするケースも多いと聞く。

以下はダラム大学の法律学専攻で昨年卒業したジョー・レザーの話である⁽³⁹⁾。ダラム大学でも毎年キャリア・フェスティバルが行われ、英国の著名な弁護士事

務所の代表が多くこのフェスティバルに参加し、その場で就職が決まった同級生が随分いた。ダラム大学の法律学部はオックスフォード、ケンブリッジ、ロンドンについてレベルが高く歴史も古いため、リーマンショック後でも就職状況はよく、特に成績優秀な同級生は、その場で複数の弁護士事務所からオファーをもらい、給料やその他の労働条件について直接交渉する機会にも恵まれた⁽⁴⁰⁾。

このようにキャリア・フェスティバルは有名企業のフルタイムの仕事を手に入れることのできる理想的な場であるため、レスター大学のキャリア発展支援オフィスでは学生にキャリア・フェスティバルに参加する前にあらかじめ十分な準備をするように促し、実際そのためのトレーニングを提供している⁽⁴¹⁾。まず雇用してくれる可能性のある会社に提出する履歴書の作成の仕方を伝授する。学生が自力で作った履歴書をあらかじめキャリア発展支援オフィスに1週間前までに送らせ、1週間後に予約を取らせる。その間オフィスで働くアドバイザーが履歴書を添削し、1週間後本人に1対1で助言を与え、履歴書を完成させる。

またキャリア・フェスティバルに向けた面接指導も行っている⁽⁴²⁾。まず面接時に最も頻出する質問のリストを記したマニュアルを学生に渡し、自宅で練習させ、予約をいれた1週間後にキャリア発展支援オフィスのアドバイザーと1対1で20分ほどの模擬面接を行う。その後の10分でアドバイザーが直すべき点などについて助言し、学生はそれを参考にしてキャリア・フェスティバルに臨む。

履歴書作成並びに面接に向けての指導はキャリア・フェスティバルの時だけでなく年中行っている。ここで実際面接指導を受けたマリア・コリンズは、この模擬面接は成功の秘訣をわかりやすく具体的に伝授してくれ、本番の際大いに役立ったと話してくれた⁽⁴³⁾。

キャリア・フェスティバル以外で公募された職に応募する場合、英国では履歴書と共に *personal statement* と呼ばれる応募者の声明文と *cover letter* (添え状) も送るのが習わしである。前者の中で応募者はその企業に興味を持った理由、自らの長所、特技、資格、職歴 (特に応募している企業と同じ分野における職歴)、キャリアの最終目標、求人職に適任であると思われる理由、その企業に入社した際の貢献度を的確に述べるのが要求される。後者の中では応募者の手紙の書き方などのスキルが試される。企業は二つの書類によって応募者が企業に相応しい人材

かどうかを判断し、相応しいと判断した者と面接し最終決定をする。つまり書類の書き方次第で就職が左右される。レスター大学のキャリア発展支援オフィスでは書類作成のノウハウを伝授する説明会を定期的に開き、更に各学生の書類添削や個別指導も施している。

卒業生で説明会などに参加出来ない者、アドバイザーと直接会えない者には電話やメールによる相談、添削も受け付けている。上記したような履歴書、personal statement、添え状、面接は大学院進学希望者にとっても必ず必要なものなので、各学生のニーズに合った幅広いアドバイスを提供している。

レスター大学のキャリア発展支援オフィスは現在、同大学の学部生、大学院生の就職率を高めるために他にも次のような活動をしている。まずレスター大学賞(The Leicester Award) プログラムを設けた⁽⁴⁴⁾。このプログラムの中には多くの雇用者が卒業生を採用したいと切望するような技術や経験を在学中に身に付けさせる訓練を行う短期、長期の様々なコースがある。中にはプレゼンテーションや討論の仕方を指導するものもあり、どのコースにもレスター大学の在大学生であればだれでも登録でき、各学生は1年間に1コースの参加が可能である。

また英国では雇用者が応募者の職歴を重視する傾向にあるので、学生が在学中に少しでも多くの職場経験を積めるような活動を積極的に展開している。まず前記したサンドイッチコースの学生を実習生として受け入れてくれそうな会社や団体の情報提供と実際の交渉の手助けを行っている。次に全学部の学生を対象とした週末、休暇中のインターンシップ、ボランティア活動の情報を地元(レスター近辺)だけでなく、英国中並びに海外(主にヨーロッパ諸国)や多国籍の企業、団体から直接収集し、また大手の人材派遣会社とも提携して入手し、学生に提供している。このような情報提供は勿論卒業後の就職先を探している在大学生、卒業生になされている。中でもキャリア発展支援オフィスを直接訪れアドバイスを求める者には、希望する職種の求人広告をどのようにインターネット上で効率よく検索していくかも指導してくれる。加えて自分の名前と希望の職種の一覧をアドバイザーに渡し、キャリア発展支援オフィスのコンピューターシステムに登録しておく、本人の希望する職業が公募された際、メールで情報を送付してくれる。

レスター大学のキャリア発展支援オフィスでは大学教員を目指す博士課程の大

大学院生を支援するためのプログラムも組んでいる。大学院生を学部生の個別指導教官 (tutor) として時間給で雇い、専任教員の講義の後の補習授業であるチュートリアルを担当させ、専任教員の補佐役を務めさせる機会を与える。このような大学での教授経験を大学院生に積ませることにより、大学職に就きやすくすることを目標としており、実際効果をあげている。

また英国あるいはヨーロッパの大学で国際交流部の職員および他の部局の事務職員を希望している学生に対しては、レスター大学で実際に休暇中インターンとして働くことを認めている。卒業後起業を希望している学生対象のビジネスプロジェクトと呼ばれるコースもあり、ビジネスを始めるにあたって必要な知識を提供している。キャリア発展支援オフィスにはビジネス界で豊かな経験を持つアドバイザーがおり、最初の運営資金の集め方や得意先の増やし方など具体的な助言を与えてくれる⁽⁴⁵⁾。

近年レスター大学のキャリア発展支援オフィスが特に力を入れている部門は留学生のための就職支援活動である。2005年ごろまでは英国の大学にはアメリカ、オーストラリア、カナダなどの英語圏やヨーロッパの先進国、アフリカ、インド亜大陸、東インド諸島など旧英国植民地からの留学生が多かった。しかし、前述したように2005年以後、中国本土、ブラジルなどからの留学生が急増し、卒業後も英国内で就職を望む者が増えてきたため、この新現象への対応策が求められるようになった。この10年間に特にポーランドのようなEUの東ヨーロッパ諸国からの多くの移民が英国に入学したため、英国の失業率は悪化する一方である。この結果英国の旧植民地やEU以外の方が英国で労働許可証を得ることはなかなか難しい。この現状を留学生に説明しながらも、英国内での就職先を探す手助けをし、就労者には、労働許可証を発行する内務省 (Home Office) との連絡の取り方や許可証取得用の応募用紙の記入方法を伝授している⁽⁴⁶⁾。このようにレスター大学のキャリア発展支援オフィスでは様々な就職支援活動を活発に行っており、在校生、卒業生の就職、転職に重要な役割を果たしている。

おわりに

最近では日本においても文部科学省が大学のキャリア教育をかなり真剣に考え、大学もキャリア教育をカリキュラムに取り入れ、キャリア支援部を設けて、様々な就職支援活動を展開している⁽⁴⁷⁾。日本のキャリア支援部と英国のキャリアオフィスの活動を比較すると、次のような類似点があることに気づく。キャリアサポートプログラム、就業力育成・認定プログラムの運営、就職ガイダンス、模擬面接、履歴書作成指導、インターンシップ実習先の手配、企業から各大学に寄せられた求人広告を学生にアクセスさせることが出来る求人ナビの管理、個別相談、就職や進学に関する各種書籍、資料、パンフレットなどの貸し出しと閲覧などである。

しかし日本の大学のキャリア支援部が仲立ちをするインターンシッププログラムは夏期休暇中の5～10日間である場合が多く、大学の学期中も3か月に亘るか週末だけに限るようだ。体験者の話では、あまりに実習期間が短いため、仕事を覚えるまでには到底至らず、実習先で仕事の充実感を覚えられず、卒業後の仕事をオファーされても受諾しなかったという話を多く耳にした。英国の企業のように実習期間が1年と長く、有給であれば、モチベーションも上がり、仕事、企業に対する関心も増し、社会への理解も当然深まるであろう。また日本では各大学と提携している企業数も極めて限られており、インターンシップ参加希望の学生に対し、一定数の枠を確保しているにすぎないのが現状だ。今後日本の大学は英国の大学に倣って国内はもとより、海外の多くの企業や組織団体とより密接な関係を構築し、提携企業数を大幅に増やし、在學生に企業現場で就業体験させることをさらに奨励すべきだ。加えてインターンシップの実習期間の延長も考慮する必要があると思う。海外（特に英語圏）におけるインターンシップは就業体験に加えて語学力のレベルアップにも繋がり極めて有効である。

日本の大学が英国の大学から学ばなければならない点は、英国のようにキャリアコースをさらに増やしていくことである。もちろん日本の大学にも医学部、看護学部、薬学部など学生が国家試験に合格さえすれば専門知識を用いた就職に簡単に結びつく英国の vocational courses に相当するコースもある。しかし大半の学

部卒業生は専攻した分野の仕事に就けない場合が多い。たとえば英国の大学で外国語を専攻した者は3年次に1年間専攻している語学圏での生活が義務付けられているため、4年次にはその言語の4技能を完璧に近い状態まで大半の学生が習得している。しかし、日本の大学では中学校から学んでいる英語を専攻している学生でさえ、大学卒業までに英語を武器として用いることが出来るレベルにまで達する者は少ない。また大学で教職課程を選択しても、簡単に公立学校の教師になれるわけでもなく、教育実習期間が非常に短いため、教壇に立てたとしても不安が残る。英国の大学に多くみられるような高度な学術的専門教育と実務教育をうまく組み合わせたコースが極めて少なく、大学の新卒者が就職先ですぐに専門分野を活かせるケースはほとんどない。今まで長い間多くの日本企業は大卒の新入社員に膨大な時間とお金を費やして会社に貢献できるような人材を育てあげてきた。しかしながら昨今では日本企業においてもグローバル化が進み、外国人を採用するところも増えてきたため、西洋の企業に倣って初めから第一線で活躍できるような人材を求める傾向が強まっている。こういった状況に合わせて、日本の大学は英国のサンドイッチコースや year abroad コースを取り入れることはできないだろうか。実際東京工学院専門学校や ECC 外語専門学校などでは語学を専攻する学生を対象に「エアトラサンドイッチ留学」と称する英国の大学のサンドイッチコースを真似たシステムを既に導入している⁽⁴⁸⁾。1年目は日本の専門学校で専門とする語学の基礎力や海外生活の知識を養い、2年目に海外留学し、3年目に日本の専門学校に戻り、語学力をアピールする就職活動を行い、卒業するというプログラムだ。

日本の大学の海外にある姉妹校に交換留学生として1年間留学してきた多くの学生は身に付けた語学力を武器にして帰国後簡単に就職が決定する傾向にある。これは語学力アップが将来の選択肢を広げることを証明している。残念ながら各大学で交換留学制度を利用して海外の大学で1年間勉強できる学生数は大変限られている。しかし認定留学制度を用いて、学外の留学専門の有料のサポート機関に仲介を依頼し、諸手続きなどを代行してもらえば、比較的簡単に留学することが可能である。コストの関係や卒業が1年延びるなどなかなか難しい問題も多々あるだろうが、専門知識を拡げ、語学力を伸ばすためには、海外留学は必然だと思う。

最後に今回英国の現役大学生や卒業生を対象に数多くの聞き書きを行った結果発見したことは、英国と日本の大学生とでは就職に対する姿勢が随分異なっていることだ。英国の大学生の場合、強い目的意識を持って大学に進んでいる人が多いことに驚いた。また英国では大学進学が決まった段階で大学にすぐに入らず、ギャップ・イヤー (gap year) と呼ばれるクーリングオフ期間を1年間自分に与える選択をする生徒も多い。海外でボランティア活動や語学研修をすることによって自己発見、将来の進路の見通しを立てた後大学でしっかり学び専門能力を養うのである。サンドイッチコースや year abroad コースを選択しなかった学生でも長い夏休みを利用して、自分の大学での専門分野の企業あるいは団体に自ら積極的にアプローチし、有給であれ、無給であれ、仕事に就き、卒業までに豊かな就業経験を積もうと努力している。このような英国の大学生の計画性、強い意志、たゆまぬ努力を是非とも日本の大学生に見習って欲しいものだ。

本稿の考察が日本の大学におけるキャリアデザイン科目を担当されている教員、キャリア支援部の職員、これから就職を目指す大学生にとって何らかの参考になればと願う。

謝辞

敬称は省略させて頂いた。本稿執筆にあたりレスター大学、シェフィールド大学の先生方並びにキャリアオフィスの職員の方々には多大なるご協力を賜った。ここに厚く御礼申し上げる。

〈注〉

- (1) 白井厚・白井堯子『オクスフォードから』日本経済評論社、1995年、藤原正彦『遙かなるケンブリッジ、数学者のイギリス』新潮社、1991年、リチャード・オールドリッチ著、山内乾史・原清治訳『教育の世紀』学文社、2011年、リチャード・オールドリッチ著、松塚俊三・安原義仁訳『イギリスの教育—歴史との対話』玉川大学出版部、2001年、リチャード・オールドリッチ著、山崎洋子・木村裕三訳『教育史に学ぶ—イギリス教育改革からの提言』知泉書館、2009年、荻谷剛彦『イギリスの大学・日本の大学、カレッジ・チュートリアル、エリート教育』中央公論社、2012年。

- (2) Personal interview with Miss Maria Collins, 23 August 2013, Leicester.
- (3) Personal interview with Prof. Steve King, 5 September 2013, Leicester.
- (4) Personal interview with Dr Elizabeth Hurren, 20 August 2013, Leicester.
- (5) Personal interview with Mr David Mackay, 18 September 2013, London.
- (6) 黒柳修一『現代イギリスの教育論 — 系譜と構造』クレス出版、2011年、184 – 187頁。
- (7) Personal interview with Prof. Keith Snell, 20 August 2013, Leicester.
- (8) Personal interview with Mrs Helen Mackay, 23 August 2013, Leicester.
- (9) Personal interview with Mr Geoff Elwell, 8 September 2013, Leicester.
- (10) Personal interview with Mrs Julie Leather, 5 September 2013, Nottingham; Personal interview with Dr Jonny Lenten, 29 August 2013, Leicester; Personal interview with Mrs Sam Lenten, 29 August 2013, Leicester..
- (11) Personal interview with Mrs Ruth Snell, 15 September 2013, Gloucester.
- (12) サンドイッチコースについては University of Brighton <http://www.brighton.ac.uk/> を参照。
- (13) Personal interview with Miss Katie Elwell, 8 September 2013, Leicester.
- (14) Personal interview with Mr Ian Walker, 10 September 2013, Leicester.
- (15) Personal interview with Miss Madeline Leather, 5 September 2013, Nottingham.
- (16) Personal interview with Mr Seb Lenten, 29 August 2013.
- (17) Katie Elwell 聞き取り。
- (18) Personal interview with Prof. Rod Smith, 19 September, 2013, Oxford.
- (19) Year abroad course については University of Leicester, *Undergraduate Prospectus 2012/2013*, Leicester, 2012 を参照。
- (20) Collins 聞き取り。
- (21) 同上。
- (22) 同上。
- (23) David Mackay, 聞き取り。
- (24) Collins 聞き取り。
- (25) Personal interview with Prof. Peter King, 4 September 2013, Leicester.
- (26) Leicester University の School of Education の職員より情報を入手した。
- (27) Personal interview with Ms Rebecca Wale, 18 September 2013, London.
- (28) Collins 聞き取り。
- (29) ソーシャル・ワーカー、学芸員の資格が取れる Postgraduate Diploma や M A コースの詳細については University of Leicester, *Postgraduate Prospectus 2012/2013*, Leicester, 2012 を参照。
- (30) Personal interview with Mrs Sheila Lenten, 15 August 2013, Leicester.
- (31) The School of Museum Studies, University of Leicester, *Postgraduate Handbook, 2012-2013*, Leicester, 2012.
- (32) Collins 聞き取り。

- (33) Personal interview with Mr Iain Mackay, 23 August 2013, Leicester.
- (34) Personal interview with Prof. Gordon Daniels, 1 September 2013, Sheffield.
- (35) レスター大学のキャリア発展支援オフィス (Career Development Service) の詳細は <http://www.2.le.ac.uk/offices/careers-new> を参照。
- (36) シェフィールド大学のキャリアサービスについては <http://www.shef.ac.uk/careers> を参照。
- (37) <http://www.2.le.ac.uk/offices/careers-new> を参照。
- (38) 同上。
- (39) Personal interview with Mr Joe Leather, 5 September 2013, Nottingham.
- (40) ダラム大学の Careers, Employability and Enterprise Centre については www.dur.ac.uk/careers/ を参照。
- (41) レスター大学のキャリア発展支援オフィスの Ian Walker 聞き取り。Personal interview with Mr Ian Walker, 7 September 2013, Leicester.
- (42) 同上。
- (43) Collins 聞き取り。
- (44) レスター大学賞については <http://www.2.le.ac.uk/offices/careers-new> を参照。
- (45) Ian Walker 聞き取り。
- (46) 同上。
- (47) 山田耕路『大学教育について考える』海鳥社、2006年、100頁、菊地達昭『キャリアデザインへの挑戦』経営書院、2007年、79～173頁、渡辺峻編著『大学生のためのキャリア開発入門第2版』中央経済社、2008年、135～146頁、寿山泰二他著『大学生のためのキャリアガイドブック』北大路書房、2010年、2～3頁、大久保功他著『18歳からのキャリアプランニング、これからの人生をどう企画するのか』北大路書房、2008年、42～44頁。
- (48) ECC 国際外語専門学校のサンドイッチ留学については <http://kokusai.ecc.ac.jp/feature/other02/> 参照。東京工学院専門学校の「エアトラサンドイッチ留学」については <http://www.technosac.jp/air/english/abroad.php> 参照。

(字数制限のため参考文献は省略した。)